

臨床報告

石灰化上皮腫の臨床的検討

東京女子医科大学 第二病院皮膚科（部長：平野京子教授）

キノ シタ シダ ミ スズ キ クミコ
木 下 茂 美・鈴 木 久美子

（受付 昭和60年11月6日）

はじめに

1880年 Malherbe¹⁾によって皮脂腺由来の腫瘍として命名された石灰化上皮腫は、現在 hair matrix origin とされ日常外来においてしばしば遭遇する良性腫瘍である。その外観は多様で興味深く、病理組織により確定診断される。今回我々は、腫瘍周囲に脱毛巣を認めた石灰化上皮腫の1例と、水疱様外観を呈した1例を症例報告すると共に、当科において15年間に経験した石灰化上皮腫15例18腫瘍について統計的考察を試みた。

当科における統計

昭和45年1月より昭和60年1月までに当科で石灰化上皮腫と組織診断された症例は、15例18腫瘍で臨床所見は表1の如くである。

1. 発症年齢

10歳代の発症が18腫瘍中7腫瘍と一番多く、20歳未満の発症例は11腫瘍（約61%）を占め、若年者に好発する傾向がみられた。また発症から初診時までの期間は1カ月から6カ月までが6例と最も多く、1カ月以内3例、6カ月から1年以内3例で発症に気付いてから1年以内に来院する例が2/3を占めていた。

2. 性別

男女比7：8と有意差は認められなかった。

3. 皮疹の個数

1個12例、2個3例で多発する例は稀であった。

4. 発性部位

上肢11例、肩背部3例、項部2例と圧倒的に上肢に多く、特に上腕に好発していた。

5. 自覚症

自発痛を有するのは3腫瘍、圧痛を有するのは4腫瘍で、自覚症のないものは10腫瘍であった。

6. 大きさ

小豆大から胡桃大までで、大豆大の例が多くみられた。

7. 皮疹の形態

淡褐色、淡紅色など表皮の色の変化を認めるものは15例中9例あり、水疱様外観を呈するものは2例であった。

8. 表皮、下床との癒着

2腫瘍を除いた16腫瘍が表皮と癒着し、全腫瘍が下床と可動性であった。

9. 再発、誘因

再発は全例に認めなかった。注射、虫刺、外傷などの既往も全例に認めなかった。

10. 合併症

症例 No. 5 に強直性筋ジストロフィーの合併を認めたが家族内発症の有無については不明であった。

11. 病理組織学的所見

Kossa 染色にて18腫瘍中17腫瘍に石灰化を認め、症例 No. 2 の1例に骨化を認めた。症例1から症例12においてアミロイド染色を施行したが陽性所見は得られなかった。

自 験 例

特殊な臨床形態として腫瘍周囲に脱毛巣を認めた例（症例 No. 6）と、水疱様外観を呈した例（症例 No. 12）を示す。

Shigemi KINOSHITA, Kumiko SUZUKI [Department of Dermatology, Tokyo Women's Medical College Daini Hospital (Director: Prof. Kyoko HIRANO)]: Clinical study on calcifying epithelioma.

表1 症例の臨床所見

症例	年齢	性	個数	発生部位	摘出迄の期間	自覚症	初診時の大きさ	皮疹の形態	皮膚との癒着	下床との癒着
1	19	♀	1	右上腕外側	4ヵ月	自発痛	うずら大	中心部水疱形成 周辺部淡褐色の皮下腫瘍	+	-
2	49	♂	1	右上腕屈側	10年	-	大豆大	表面淡褐色の皮下腫瘍	+	-
3	12	♀	1	左上腕屈側	1年半	自発痛	示指頭大	表面淡紅色の皮下腫瘍 一部淡黄色	+	-
4	7	♀	2	1 左上腕屈側 2 左上腕屈側	不明 3ヵ月	-	小指頭大 大豆大	表面淡褐色の皮下腫瘍	++	-
5	11	♀	1	項部	不明	-	小指頭大	表面常色の皮下腫瘍	+	-
6	41	♀	1	右前腕外側	3ヵ月	-	小豆大	表面淡褐色の皮下腫瘍 周囲に小児手拳大の脱毛巣	+	-
7	44	♂	1	項部	不明	-	小鶏卵大	表面常色の皮下腫瘍	+	-
8	14	♀	2	1 左肘窩外側 2 右側頸部	4年 1年	- 自発痛	拇指頭大 小豆大	表面淡紅色の皮下腫瘍	++	-
9	15	♀	2	1 右肘窩外側 2 右背部	1年 1週間	-	大豆大	表面淡紅色の皮下腫瘍	++	-
10	3	♂	1	左肘窩	1ヵ月	圧痛	小指頭大	表面中心部淡黄色 周辺部紅色の皮下腫瘍	+	-
11	44	♂	1	左上腕外側	2ヵ月	圧痛	胡桃大	表面淡紅色の皮下腫瘍	+	-
12	15	♂	1	右背部	3ヵ月	圧痛	拇指頭大	弛緩性水疱, 中心部灰白色 結節多数有する皮下腫瘍	-	-
13	8	♂	1	左上腕外側	2ヵ月半	圧痛	大豆大	表面常色の皮下腫瘍	+	-
14	64	♀	1	左肩部	1ヵ月	-	小指頭大	表面常色の皮下腫瘍	+	-
15	6	♂	1	左眉毛部	1年	-	大豆大	表面淡紅色の皮下腫瘍	+	-

症例 I

患者：R.N., 41歳, 女.

初診：昭和56年4月.

現症：右前腕屈側部に7×8mmの表皮と癒着し、下床とは可動性の痂皮の附着する皮下腫瘍を1コ認める。腫瘍周囲には、50×50mmの円形脱毛巣がみられる（写真1）。

病理組織学的所見：真皮から皮下組織にかけて腫瘍塊を認め、腫瘍細胞は陰影細胞より成り立っている（写真2）。Kossa染色において陰影細胞内に石灰化を認めた。

経過：腫瘍を除去した約2ヵ月後には、周囲の円形脱毛巣も35×35mmと漸次縮小してきた。尚、本例は左眉毛部にも脱毛巣を認めたが腫瘍は認められなかった。

症例 II

患者：Y.K., 15歳, 男.

初診：昭和59年8月.

現症：右上背部に2×3cmの淡褐色、表面弛緩性水疱様外観を呈し、触れると被覆表皮及び下床とは可動性で中心部に灰白色結節を多数有する硬い腫瘍を認める（写真3）。

病理組織学的所見：表皮には著変なく、真皮は浮腫性で毛細血管様管腔の増殖及び拡張を多数認める（写真4）。管腔の基底膜はPAS及び鍍銀染色陰性であり、リンパ管と考えられる。真皮下層から皮下組織にかけて薄い線維性結合織の被膜でおおわれた腫瘍塊があり、腫瘍実質は好塩基性細胞の混在した陰影細胞より成り立っており、陰影細胞の一部はKossa染色陽性であった。間質には

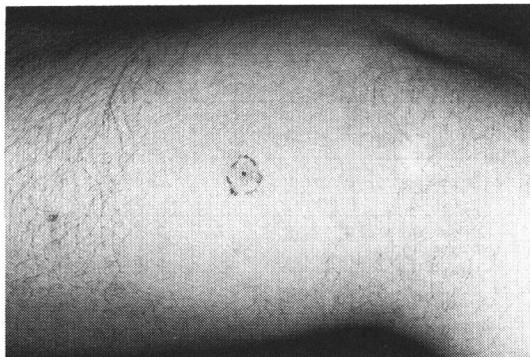


写真1 症例1：右前腕屈側の臨床所見



写真2 症例1：病理組織所見。HE染色，弱拡大

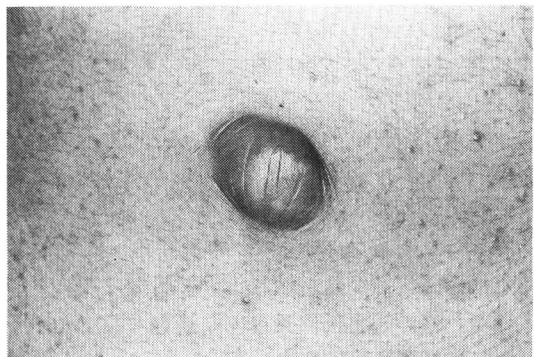


写真3 症例2：臨床所見，正面

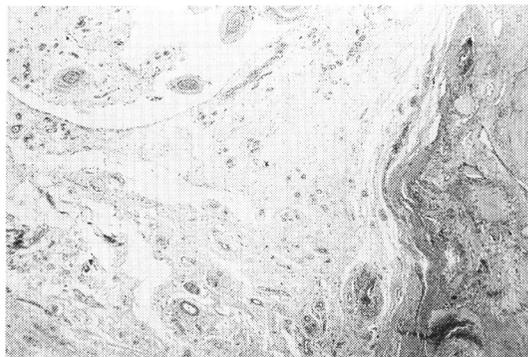


写真4 症例2：病理組織所見，HE染色，強拡大リンパ管の増殖と拡張

されている。また、水疱様外観を呈した本腫瘍は、1968年鈴木⁵⁾の報告を初めとして次々と報告されている。

新妻⁴⁾によると石灰化上皮腫の発症年齢は、51例中10歳未満8例，20歳未満29例，30歳未満10例で，若年者に好発すると述べており，当科における結果とも一致していた。水疱様外観を呈する本腫瘍については，飯岡⁶⁾が30歳未満85%で，特に10歳代が52%をしめ10歳代に圧倒的に多く，当科で経験した2例も19歳と15歳であった。

発症部位においては，新妻⁴⁾が86例につき検討し，上肢31例，顔面21例，軀幹12例，頭部8例，項部7例，頸部4例，下肢3例と上肢と顔面に多いと述べている。それに比し当科の統計では，上肢11例，肩・背部2例，項部2例，眉毛部1例と上肢に好発するのは同様であったが，顔面に好発する例は少なかった。水疱様外観を呈する本腫瘍は，飯岡⁶⁾によれば肩，上背部，上腕の機械的刺激を受け易い部位に発症する例が多く，当科例も上腕と背部に発生していた。このことは先に述べた水疱様外観を呈する本腫瘍の好発年齢である10歳代は特に運動量が多く，外的刺激を他の年代よりも多く受けているからであろう。

性別に関しては，新妻⁴⁾，飯岡⁶⁾と同様本臨床型に特別の傾向はみられなかった。

発症から初診時までの期間については，石河⁷⁾が1年以内が大部分を占めるとしている。当科例でも1年以内に来院する例が2/3を占めていた。

異物巨細胞を含む細胞浸潤を認めた。

経過：切除後6ヵ月しても再発はみられなかった。

考 察

石灰化上皮腫の統計的観察は，Forbis²⁾，Lever³⁾，本邦では新妻⁴⁾によって詳細に検討

個数については、新妻ら⁴⁾が、単発65例、多発10例（2コ4例、3コ4例、4コ2例）で通常単発であり、当科例でも同様であった。

特殊な臨床形態として症例2のような水疱様外観を呈した病変の形成機序としては、中村⁷⁾によれば、外来の刺激ないしは炎症によりリンパ管が狭窄ないし閉塞され、リンパ液が貯溜し、数回の炎症反応とリンパ管のうっ滞とが悪循環を起こして次第に増強され、遂には水疱形成にいたると述べている。症例2の病理組織所見も、リンパ管の増殖と拡張を多数認め、間質に異物巨細胞を含む細胞浸潤を認めることにより、やはり刺激による炎症反応とリンパ管の拡張により水疱形成をきたしたものと考えられる。

次に症例Iのような石灰化上皮腫の周囲に脱毛を伴った例は永井ら⁸⁾により3例報告されているのみであり、そのうち被髪頭部に生じた2例では病巣部に一致して脱毛がみられ、眉毛部に生じた1例ではその部位の発毛が粗であった。この腫瘍周囲の脱毛は、腫瘍の一次的な機械的刺激による血行障害、末梢神経機能障害によるものと考えられる。

結 語

当科における石灰化上皮腫15例18腫瘍について

統計的観察を試み、そのうち2症例を臨床報告した。

稿を終えるにあたり、御校閲を賜りました平野京子教授に深謝致します。

本論文の要旨の一部は日本皮膚科学第597回、第617回東京地方会において発表した。

文 献

- 1) Malherbe, A. and Chenantais, J.: Note sur l' épithéliome calcifié des glandes sébacés. Progr méd 8 826~828 (1880) —6) より引用
- 2) Forbis, R. Jr. and Helwig, E.B.: Pilomatrixoma (Calcifying Epithelioma). Arch Derm 83 606~618 (1961)
- 3) Lever, W.F. and Griesmer, R.D.: Calcifying epithelioma of Malherbe. Arch Derm and Syph 59 506~518 (1949)
- 4) 新妻 寛・他: 石灰化表皮腫. 皮膚臨床 8 206~212 (1966)
- 5) 鈴木啓之: リンパ管の拡張を伴った石灰化表皮腫. 日皮会誌 78 257 (1968)
- 6) 飯岡昭子・他: 水疱様外観を呈した石灰化表皮腫. 皮膚 20(1) 68~77 (1978)
- 7) 中村絹代: 水疱様外観を呈した石灰化表皮腫. 臨床皮膚 29(11) 947~950 (1975)
- 8) 永井智子・山口全一: 水疱様変化を伴った石灰化上皮腫. 日皮会誌 86(11) 755~766 (1976)